



TITLE:

靺鞨史研究に関する諸問題

AUTHOR(S):

小川, 裕人

CITATION:

小川, 裕人. 靺鞨史研究に関する諸問題. 東洋史研究 1937, 2(5): 466-485

ISSUE DATE:

1937-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138757>

RIGHT:

靺鞨史研究に關する諸問題

小 川 裕 人

緒 言

東滿洲に勃興した渤海・金・清等の國家の主要構成分子(渤海に就いては多
少の異論もあるが)は、皆同一民族系統で所謂女真系のものである。然しその發展の主勢力を成したものと部族系統は、各異れるものであることは大體認めてよいやうである。而してその部族別の分化は、彼等が靺鞨と稱せられて居た時代に、既に出來上つて居たと推せられる。然らば彼等が各々時を異にして勃興したのは何故であらうか。彼等が各々別の時に至つて始めて活動し始めたのは何故であらうかといふ疑問は先づ起る。こゝにも靺鞨史研究の興味が存する。

彼等の發展は外部的な政治的事情にもよるところ多いだらうが、内部的な、各部族の一般文化や社會經濟的方面の發達程度とも、重要な關聯を有することは勿

論であらう。その活動の原動力を成したものはその naive な精力ではあるが、これが異常な發展力となるまでには、文化・社會・經濟各方面の諸條件が充たされる必要があつたであらう。而してこれ等の諸條件を規定するものとしては、民族性や、自然的環境や、他の文化民族との直接・間接の接觸等を第一に數ふことが出來るであらう。こゝに於いて彼等の民族系統の源流や、その住地・移住地の問題や、文化國との政治關係等は先づ研究の對象となる。

靺鞨の研究は支那に於いては清朝時代から主としてその住地に關して行はれ、遂に吉林通志の如き成果も得られた。我國にも靺鞨の名は古く平安時代から知られて居たが、その研究が特に盛となつたのは日露戰爭後、白鳥博士監修の下に、松井等・箭内互・稻葉岩吉の諸家が、滿鐵の委囑を受けて研究を開始されて以後

のことである。その成果は大正二年滿洲歴史地理二卷となつて現れた。同書中、第一卷の第五編、箭内博士の「南北朝時代の滿洲」の中の勿吉の部(頁三二三)、第七編、松井等氏の「渤海國の疆域」等は、この問題と重要な關係がある部分である。その後白鳥博士の主

宰の下に津田・松井・箭内三家に、新に池内博士も加はれて、更に深くこの方面の研究は進められた。その結果は滿鮮地理歴史研究報告となつて世に出で、この問題に關してのみならず、一般滿鮮史研究に於ける最高水準を殆ど獨占されるに至つた。同報告第一卷(大正四年)の津田博士の「勿吉考」は、直接勿吉即ち靺鞨の研究を目的とされたものであり、「渤海考」に於いてもこれに關係ある諸考説を出されて居る。次いで第三卷(大正五年)に於いては、池内博士の「鐵利考」、津田博士の「遼の遼東經略」に於いて、各靺鞨諸部の佳地に關する

新研究を發表されたので、こゝに至つてこの問題の研究は、全然新局面を展開し終つた。爾來二十年、同報告にはこの問題を直接その對象とした研究は見られなかつたが、今年一月發行の同報告第十五に於いて、池内博士は「勿吉考」を發表されて、勿吉の民族系統に

關する一新説を出されたので、問題は再び新にされた觀がある。

滿洲歴史地理は、大體吉林通志の説を採られた點が多かつたが、滿鮮地理歴史研究報告に至つては、通志の説の批判に出發して、全くこれを變改された部分も多く前者が歴史地理のみに終始して居たのに、後者は更に政治や文化方面をも顧みられて居るので、史料不備なる靺鞨の研究はこゝに至つて既にその行き得る所まで行き着いた觀がある。斯くの如き先人の偉大なる功績に對し、淺學が卑見を挾むのは、全く盲蛇の誹を免れないが、同一事項に關して異説多く、その歸一するところを知らざる現狀に於いては、これが整理を試みるのも後學の義務かと考へ、單に忘備錄の意味に於いて小文を草して見た。卑見の對象が主として池内博士の「勿吉考」となつたのは、この論文が最も新しく且つ最も多くの問題を孕んで居るからであることを豫め博士の御諒恕を請ひたい。

一、靺鞨の民族系統問題

勿吉即ち靺鞨なることは、既に全く異論はなく、又

勿吉がツングース民族なる女眞系のもので、その前身は挹婁即ち晉代の支那人から肅慎と呼ばれた種族であることは、魏書がこれを斷定して以來諸史悉くこれに従ひ、又我が學界に於いても無條件に信ぜられるに至り、津田博士（勿吉考滿鮮^一、頁二一）も烏山喜一氏（滿鮮文化史^二）も等しくこの見解を支持された。然るに近頃池内博士が韃靼夫餘説を出された（滿鮮十五^三）ので、この問題はこゝに至つて始めて検討さるべき時に至つた。

挹婁は純粹のツングース族系統と目されて居るのに夫餘は濊貊（即ちツングースに蒙古系の血）系統に屬するものである。又挹婁族の人類は夫餘族に似て居るが、言語は夫餘や高句麗等濊貊系のものと異つて居た（魏志挹婁傳）文化の上から見ても、挹婁は東滿洲の密林地帯に在つて、石鏃を用ひ、狩獵生活をし、各民族分立して統一なく、經濟的にも社會的にも幼稚な狀態に停滯して居たのに、夫餘は松花江流域の平坦部に於いて、既に金屬製の武器を用ひ、農耕を主とし、政治的にも統一があつて、王があり、官制も相當に定つて、未だ民族的社會より脱しては居ないが、挹婁に比して遙かに進歩せる社會組織に在つたのである。されば勿

吉（靺鞨）が夫餘系に屬するか、挹婁系に屬するかは、韃靼史研究上の重大問題である。池内博士は勿吉を夫餘の後とされるから、これが太和十二年以後、屢稽矢石を北魏に貢したのは、勿吉が太和十八年阿什河地方の夫餘の王家を驅逐するより數年前、既に東方牡丹江流域の挹婁を服屬せしめたためだと見られ（滿鮮、十、北齊の初めに於ける肅慎（挹婁）の來獻は、東魏の末（武定五年）勿吉の朝貢の中絶した頃、その勢力の失墜があつたので、挹婁が後魏時代以來の勿吉の羈絆を脱したためであらうとされるのである。

池内博士がこの説を立てられたのは、博士が勿吉勃興當時の住地を、今の吉林と見られ、牡丹江流域の挹婁族との間に高句麗の勢力下に在つた阿什河流域の夫餘の存在を認められるからである。されば池内博士の勿吉夫餘説は、博士の魏代の夫餘を阿什河流域に置かれる考説と不離の關係に在るもので、當時夫餘が阿什河流域になかつたとすれば、勿吉夫餘説は重要な支持を夫ひ勿吉勃興當時の住地は阿什河流域であつてもよく、又勿吉は牡丹江流域から夫餘本國の滅後、挹婁族の移住したものと見てもよいこととなる。こゝに於い

て當時の夫餘の住地が問題となるのである。

二、魏代の夫餘

資料(a)(b)(c)によつて、魏代に夫餘の存したと疑ひないが、その據所に就いて異論があるのである。これに關して主なる説二ある。

(イ)松花江上流域説、津田博士は魏代の夫餘を廣開土王碑に見える東夫餘とし、舊夫餘の東南境なる一小地域、即ち長白山方面なる松花江の上流域と見られた(滿鮮、一頁七)

(ロ)阿什河流域説、池内博士は夫餘(2)本國の餘族が魏代にも阿什河流域に居たと見られるのである。

(イ)の説に於いて、東夫餘は太康六年夫餘國王が慕容廆に攻め殺された時、その子弟が北沃沮即ち今の間島地方に立てた國で、松花江流域に於けるものでないことは池内博士が既に指摘された(滿鮮十三、頁八八—八九、九一)如くである。さればこの説は既に検討され終つたと見られる。

(ロ)の説にも積極的な證據があるわけではなく、只資料(c)に見える如く、魏代の夫餘が黄金を産したと

いふことが唯一の手懸りのやうである。

然るに沙金の産地は、現代東滿洲の到る所の河水に在つて、又探訪冊にも金の産地に就いて、今麻衣河・古洞河及渾春・寧古塔・三姓等處皆産とあり、冊府元龜を見ると今の依蘭以東に住した黑水靺鞨が、金を唐に貢したことが記されて居る。されば金代に今の阿什河が、金を産したといふ事實から、魏代に金を産したといふ夫餘も、亦こゝに住したと推定するのは早計ではなからうか。池内博士の魏代夫餘阿什河説も尙検討を要するものゝやうである。

東夫餘が津田博士の言はれた如く松花江上流域には在らず、池内博士の指摘された如く間島地方に在つたこと疑ないから、東夫餘の出來た(資料d)西晉太康六年(西紀二八五)から夫餘本國が慕容皝に攻伐された東晉永和二年(西紀三四六)まで六十年間は、夫餘は間島地方と松花江流域地方との二ヶ所に存したのである。然るに永和二年に夫餘本國には資料(e)に見えるやうな事件があり、東夫餘には高句麗廣開土王の二十年(西紀四一一)に資料(f)に見えるやうな事件があつた。されば魏代に存在した夫餘は、夫餘本國系のものか、東夫餘系のもの

のか、即ち松花江地方のものか、間島地方のものか、問題となるのである。

池内博士は資料(e)の記事に於ける鹿山は、阿什河地方の山とされ、百濟は高勾麗の誤で、晉代既に高勾麗の勢力が阿什河地方にも及び、又夫餘本國(今の農安地方説に賛せ)が燕王慕容皝の攻伐を受けた後も滅びたのではなく、その餘衆は燕の敵なる高勾麗によつて阿什河地方に住せしめられたとされ、東夫餘は資料(f)に於ける事件によつて滅亡したと見られるのである。

然し夫餘本國が資料(e)に見える事件の後、尙殘存したと認むべき證據は更になく、資料(f)によつても東夫餘が廣開土王の征略によつて滅亡したとは確言し難い。又阿什河地方も金を産したかも知れぬが、琿春河や圖們江下流の左岸が沙金の産地なることも有名なことで、これは資料(e)に見えるやうな夫餘の住地として、阿什河地方に劣らざる資格を有すると言へよう。

然るに魏書勿吉傳には、

明年(太和十年)復入貢、其傍有大莫盧國・覆鍾國・莫多回國・庫婁國・素和國・具弗伏國・匹黎介國・拔大何國・郁

羽陵國・庫伏眞國・魯婁國・羽眞侯國・前後各遣使朝獻、太和十二年勿吉復遣使貢楮矢方物於京師。とある。

魏書には夫餘の專傳のない上に、右の如く太和十年(西紀四八六)頃の勿吉の周圍に在つたといふ十數國の中にも、夫餘は加へられて居ない。若し池内博士の主張される如く、勿吉が今の吉林地方に在り、夫餘國が阿什河地方に在つたなら、古來有名なこの夫餘が、勿吉の周圍の國として擧げられて居ないで、却て哈爾濱の對岸地方に住して居た大莫盧(豆莫婁)が筆頭に記されて居るのは、甚だ解し難いことである。

右の様な事情は、夫餘が遠く間島地方に在つて既に高勾麗の勢力範圍に歸して居たためであらう。又魏書(卷一〇〇)高勾麗傳には、西紀四三五年頃、高勾麗に使した後魏の使者李敖の報告を記して「敖至其所居平壤、城、訪其方事、云、遼東南一千餘里、東至柵城、南至小海、北至舊夫餘、民戶參倍於前魏時」とある。こゝに舊夫餘と特に舊なる文字を加へて居るのは、當時現存した夫餘ではなく、夫餘故地といふ意味に解すべきであるから、これ亦高勾麗の北なる阿什河方面には、當

時夫餘の居なかつた傍證となすに足るであらう。

されば津田博士が松花江上流地方に置かれた東夫餘を、池内博士はこれを間島地方の北沃沮に決定されたこと、又高句麗の勢力が東晉以前阿什河地方に加はつたと推定し得る資料(○)を指摘された(滿鮮、十三、頁九〇)こと等は、明らかに池内博士の功績ではあるが、魏代の夫餘をも阿什河地方に置かんとする説には、上述の如く尙疑問の餘地は存するやうである。

三、勿吉の住地と速末水

次に勿吉の住地に就いての問題に歸る。これに就いても津田・池内兩博士の説が對立する。

津田博士は勿吉國に在りといふ速末水(粟末水)を北流松花江のみの稱とし、勿吉の住地はそれより遠くない石頭城子附近とされ、資料(○)に於ける太魯水(今の洮兒河)より東北行してその國に至るといふ、東北を東方と改められた。

池内博士は勃興當初の勿吉の住地を、吉林とされたことは既述の如くであるが、右の速末水は東流松花江をも指すとし、太魯水より東北行をそのまゝに解され

て、夫餘滅亡後の勿吉の據所を今の哈爾賓地方とされた。

右兩説の分れるところは、要するに今の松花江の魏代に速末水と呼ばれた範圍に就いての意見の相違に歸着する。資料(i)(j)(k)等によると、隋唐時代に主として粟末水(速末水)と言はれたのは、北流松花江のみで、東流松花江は那河或は他(它)漏河と稱せられて居たやうに見える。然し池内博士が唐代の支那人は松花江の東流して黒水に合する部分の粟末水たることを默認して居たと主張される(滿鮮、三、頁四〇)のも、早まり過ぎた結論のやうであり、津田博士が隋唐時代の事情から、直ちに魏代に於いても東流松花江は粟末水と言はれて居なかつたと主張されるのも、行き過ぎた想像とすべきであらう。魏代の速末水と言はれた範圍は、史料皆無でこれを決すべき由もなく、従つて勿吉の住地に就いても最後の斷案は下されない。

只敢て卑見を述べると次の如くである。

今の長白山の魏代の名は從太山で、その漢名は太白山と推されるから、從は白といふ意味の勿吉語であらう。今の松花江の三國から晉時代の名は弱水で、魏代

の名は速末水で、隋唐時代は粟末水、金代には宋瓦江で、又これを白江とも言つた。宋瓦江は松阿里江と同じく天河と譯されるが、實は宋瓦も松阿里も白といふ意味であるやうである。速末・粟末（或は莫とも轉じ得る）の末は、女眞語の木克・没と同じく水或は河の意味と解すれば、速・粟は從と同じく白といふ意味であらうか。果して然らば弱水、速末、粟末、宋瓦江、松阿里江、松花江は同じ白水・白江の意味で、天河にも通するのであらう。太魯（添）水・他（它）漏河・撻魯河・淘爾河・洮兒河と轉じて同一河水名であり、難河・那河・納水・嫩江と訛しても等しく青色を意味する河水名である如く、弱水・粟末・宋瓦江・松阿里江・松花江と轉訛しても、同じく白色なる意味を有する河水名ではなからうか。今のシラムレンを弱洛水・作樂水・饒樂水・澆洛水・如洛瓊水と言つたことは有名なことであるが、これ等は同一語の異譯であるから、弱が作や如と異譯された如く、弱が速・粟と異譯されることも有り得ないことではなく、洛瓊が洛や樂と寫された如く、宋瓦が粟と寫されることも有り得ないことではなからう。

右の如く、弱水と速末とが同一語と見る推定が許されんとすれば、弱水は晉代に東流松花江をも呼んだこと明らかであるから、速水も同じく東流松花江の稱ともなり、因て勿吉國に在る速末も亦東流松花江でもよく、從つて池内博士の勿吉哈爾濱地方説は太魯水より東北行してその國に到るといふ記事を變改せずに済んで、妥當性が多いこととなる。されば津田博士の勿吉石頭城子説は從來勿吉の住地を挹婁族の住地なる牡丹江流域以東に置くことが通説であつたのに對し、これをそれより西方の夫餘の故地に置いて、牡丹江地方よりの移住説を成された點に於いて、一大進境を劃したと言ひ得るが、粟末水に就いての考説に於いては尙檢討を要するものがあるであらう。

四、勃興當時の勿吉の住地

然し池内博士の勿吉勃興當初の住地を吉林地方とする説には、疑問の餘地は十分にある。博士のこの説は既述の如き魏代の夫餘を阿什河地方に置く説に支持されて居るものゝやうであるから、魏代の夫餘が阿什河地方に住したのでなく、琿春地方に在つたこと前述の

如くであるとすれば、勿吉を吉林地方に置く考も、その支持を失ふこととなり、勃興當初の勿吉も、哈爾賓地方に置いて何等支障ないこととなるであらう。

夫餘の滅亡より二十年程前、即ち延興中に勿吉の使者乙力支が魏に朝貢した時の通路(貢料^h)に就いて見ても、初發其國、乘船沂難河と書き始めて、速末水に就いて全く記して居ないのは、當時の勿吉の住地は東流松花江岸の哈爾賓附近に在り、東流松花江のこの部分は、速末水と呼ばれた他に難河とも稱せられて居たか^らと見れば、その事情をよく理解し得るであらう。右の如く考へ來ると、勿吉は勃興當初から今の哈爾賓地方と見るべきで、これは夫餘國の壤類後牡丹江流域地方から漸次この地方に移住し來つた三國時代の挹婁族の後身であつたと見てもよからう。魏書に勿吉の言語が他の東夷と獨り異つて居たと記して居るのは、當時支那人の知つた東夷の主なるもの、即ち濊貊系の豆莫婁高句麗等と、その言語が異つて居たことを示すものであらう。然るに夫餘はこれ等の種族と言語を多く同うして居ること疑ないから(魏書豆莫婁傳、魏志高句麗傳)勿吉族は夫餘族ともその言語を異にして居たことは明らかに推せ

られる。この點より見ても勿吉は夫餘系の種族でない^{と解する方が妥當であらう}。されば池内博士の勿吉夫餘説には未だ十分の論據がないと思はれる。

又池内博士は隋代に間島地方に居た靺鞨も東夫餘の後であるとされる(滿鮮、十五、貢五六)が、これにも別に證據があるわけではない。前述の如く魏代の夫餘を間島地方のものとすれば、これは勿吉に逐はれて高句麗領内に投歸したこと資料(b)(c)に見える如くであるから、その後東夫餘の故地に據つたものは、北方から移住して來た勿吉(靺鞨)族と見るべきであることは勿論であらう。曹魏の頃、挹婁族が夏期舟に乗つて圖們河地方の北沃沮を襲つたことは、魏書沃沮傳に記されて居る。これ等の挹婁族の南下の傾向が次第に進展して遂に後魏時代には琿春地方に移住し來つて東夫餘を逐ふに至つたことも想像し得ないことではなからう。三國史記、卷五、新羅武烈王五年三月の條によると、王は當時北小京であつた何瑟羅(今の江陵)の地が靺鞨に連なり、人民安堵せずとの理由を以て、京を罷めて州に復し、都督を置いてこれを鎮せしめ、且つ悉直(今の三陟)を以て北鎮としたとあるから、高句麗滅亡以前靺鞨族は

既に今の江陵近くまで南下して居たことが分る。この事情から推察すると、魏代に靺鞨の前身なる勿吉が、瑯春地方に移住し來り、これが隋初には後述の如く號室部と呼ばれたとしても不思議ではない。

五、靺鞨の住地に關する資料問題

靺鞨諸部の中、粟末部が今の吉林、伯咄部が伯都訥、安車骨部が阿什河に住したことは、吉林通志が斷案を下して以來全く異論なきものとされて居る。その他の諸部に就いては諸研究の説多く異つて、未だ一致するところを知らない有様である。殊に拂涅部の如きはその中心問題で、これに關する説の異なるに隨つて、他の諸部の位置にも相違を來して居る。而してその見解の分るゝ重要な點は、結局靺鞨の住地に關する二資料、即ち隋・新唐二書の記事の取捨に係つて居る。吉林通志や滿洲歴史地理は新唐書の記事をも採つて居るが、滿鮮地理歴史研究報告が出づるに至つて俄然後者（資料m）の記事は、その史料的价值に疑を抱かれるに至つた。後者が黑水部を安車骨の西北として居るの（實は東北に在る）は前者（資料l）の誤をそのまゝ踏襲して居るものと見られるから、史料として獨立な價值なきものとされるのである。池内博士先づこの説を主張され（滿鮮三、鐵利考）、津田博士も初はこれに賛せられて居たやうである（後拂涅部を阿什河より東方なる瑪瑙河流域に置かれたのは、前説を變へられたのうか）。この説が新唐書の記事を捨てるのは、これが全然隋書以外の資料を用ひず、他に何等の根據なく少しく隋書を變改したに過ぎないと見られるからである。然し唐書は果して何の根據もなくして隋書の記事を改めたのであらうか。

資料（l）（m）の兩記事を比較すると、部族名の譯字を異にして居る。即ち前者の粟末・安車骨・伯咄を各、後者は粟末・安居骨・汨咄として居る點から、後者は前者以外の資料によつたことが先づ想像される。更に隋書が伯咄を粟末の西北として居るのに、唐書はこれを稍東とし、前者が拂涅部を伯咄の東として居るのに後者はこれを安車骨の益々東として居る。

又部間の距離に就いての記載は唐書獨特のものである。唐書が隋書によつたとしては、黑水部が安車骨の西北に在りとした誤は、隋書のものをもそのまゝ踏襲したとして理解出来るが、伯咄（今の伯都訥）を粟末（今の吉林）の東

北とした(實は西北である)隋書になき誤は、如何にして生じたか解釋し得ないであらう。然るに若し安車骨の西北の西と、粟末の東北の東とは實は唐書の編者によつて誤つて入れ換へられたので、唐書の用ひた資料に於いては伯咄は粟末の西北、黑水是安車骨の東北となつて居たとすれば、實狀に全く矛盾しない記事となる。北宋時代の刊本には二十字乃至二十五字詰のものが間々あるから、東北と西北が同じ位の高さとなり、兩者が入れ換へられたことがないとは保し難いであらう。果して然らばこの點に於いては唐書は隋書の記事をより精確にしたと言ひ得る。

唐書の外夷傳には前史の記事を變改したものが多く、その中には確な根據があつてこれを敢てした場合もなしとしない。例へば奚傳に於いてこれを見る。唐書奚傳の奚の位置に關する記事は、舊唐書奚傳の記事を採つたこと疑ないが、奚の住地を吐護眞水(今の老哈河)流域とし、契丹をその東北に在りとして、舊唐書が奚を饒樂水(今のシラムレン)沿岸とし、契丹をその東方として居る記事を改めて居る。然しこの變改は根據なしに爲されたのではなく、唐末に奚が老哈河に據つて居た確

な事實を知つて爲したものであることは、唐書(卷三)地理志の檀州や薊州の條を參照すれば明らかであらう。(秋貞(田村)氏「饒樂水考」を讀む……本誌一ノ二、頁五八參照)されば唐書外夷傳の編者が前史を改めるのを全く理由なくして爲したとすることは妥當でない。

唐の開元年間には拂涅を始め多くの靺鞨部族が屢唐に入貢したから、靺鞨諸部落の位置に就いても唐人がその知識を得る機會は少くなかつたであらう。されば唐人が當時の知識を以て隋書の記事に變改を加へて置いたことは有り得ないことではなからう。隋書にない部落間の距離に關する記事を附記して居る點からも、それが推せられる。隋書が拂涅と安車骨の位置を同じく伯咄より示して居るのは、その交通路が相違して居たため、拂涅を安車骨より後に記して居るのも、前者が後者より遠いことを意味するのではなからうか。以上の如く考へると隋書と唐書の兩記事は決して矛盾すると見るべきものでなく、兩立し得る餘地は十分にあるのである。さればこれを價值なきものとして排除する説は未だ定説とすることは出来ぬ。

六、拂涅部

拂涅部の位置に關する諸説は次の如くである。

- (イ) 寧安より依蘭に至る地方 吉林通志
- (ロ) 寧安の西北二百里必兒漢山 大韓疆域考
- (ハ) 東京城寧安地方を含まざる牡丹江流域

松井等氏(滿洲、一、頁四二九—

四三〇)

- (ニ) 瑪顏河流域 津田博士(滿鮮、三、頁二七一—

二七七)

- (ホ) 榆樹溝附近 池内博士(滿鮮、三、頁七一—二六

滿鮮、十五、頁二二—二七)

(イ)は今の東京城の明・清時代の名である佛訥和城は、拂涅と音が類似することから、この地方に比定した。(ロ)も亦拂涅・必兒漢の音の類似のみを理由とする。(ハ)は大體、吉林通志により、只東京城が渤海の首府であつたので、この地方を除外した。(ニ)は隋書がこの部族の方位を、伯咄より示して居ることから、なるべくこれに近く、且つ拂涅が石鏃を用ひて居るから文化的に隔離された地方を選ぶ必要があるのを理由

とする。(ホ)新唐書の記事を全く捨て、隋書が特に伯咄よりその方位を示して居る點のみから、安車骨よりも東方に置き難いとされるのである。

(イ)(ロ)(ハ)(ニ)は新唐書の記事をも考慮に入れて居るが、(ニ)は全くこれを捨てて居る。こゝに資料的に根本的な見解の分れる點がある。然し新唐書の記事が輕々に捨て去るべきものでないこと前述の如くであるとすれば、(ロ)の説には積極的な證據は全くない。

又拂涅の語意に就いて憶測を述べて見よう。

高麗史、卷四、顯宗世家十一年六月の條に見える女真人を遣して高麗に土物を獻じた弗奈國は、東女眞蒲盧毛朶部に在つた遼史の所謂兀惹なること殆ど疑ないから、兀惹は弗奈とも異譯されたのであらう。又渤海の故都なる今の東京城は、明代には弗納河城、清代には佛訥和城と言はれて居たのは有名なことである(滿洲源流考、然るに池内博士の研究(滿鮮、三、頁卷十三)七〇—八三)によれば、この地は遼代には兀惹城と言はれて居た。前述の如く兀惹が弗奈と異譯され得るとすれば、兀惹が弗訥と轉訛する可能性もなしとしない。されば兀惹(烏惹或は烏舍とも譯す)と弗訥とは同語の異譯とも見られ

る。然るに拂涅は弗奈・弗納と音が類似して居る。されば拂涅も亦兀惹・烏惹と同一の意味の語であらうと想像される。果して然らば兀惹が森林の意味であること、既に定説(滿洲、二、頁一〇七)なれば、拂涅も亦然りと考へられよう。松漠紀聞は兀惹を溫熱と寫して居るが。これは殊に拂涅に近いやうである。斯く解すれば渤海の支配下に入つて、多年その下層階級を成して居た拂涅は、渤海が減び、その遺衆が今の遼陽に遷されるや漸く擡頭して活動し始め、渤海の故都に據つたのが遼代の兀惹であらうと推される。

斯くの如く拂涅は森林といふ意味であるとすれば、これはその住地の森林地帯なるより得た名であること全く疑ひない。さればその住地が張廣才嶺以東の森林地帯であるとするのが妥當であらう。清代にこの地方の森林を大窩稽と言はれたやうであるが、唐代に大拂涅の名のあつたのもこれと同様の意味で、拂涅部は清初の窩稽部と同義であらう。斯く解すれば隋書に自拂涅以東矢皆石鏃とあるのは、張廣才嶺以東の森林地帯の靺鞨部族が既に森林を脱して年を経た松花江流域の靺鞨部族と異り、隋初にも尙石鏃を用ひて居た事情を

物語るものとして、自然地理上よりうなづかれる記事である。

されば池内博士の説よりは、吉林通志や、大體これに據られた松井等氏の説は寧ろ妥當と見るべきである。余は拂涅の故地は東平府と呼ばれた點から考へて渤海時代のその住地は寧安東部の森林地帯であつたらうと考へる。

七、白山部

(イ)敦化及び琿春西境 吉林通志先づこれを唱へ、

我が津田博士これを採られた(滿

鮮、一、頁二九)

(ロ)長白山方面 松井氏(滿洲、一、頁四三一)

(ハ)間島地方 池内博士(滿鮮、十五、頁四二—

四八)

(イ)が敦化及び琿春地方を同一部族の據所として居るのは、その中間の哈爾巴嶺山脈の難險を考慮しない說で、自然地理上の事情と矛盾する。

(ロ)はその名から只漠然とその位置を示しただけである。

(ハ)は右の兩地方を異部族の據所として居る點は探るべきであるが、新唐書の其著者曰粟末部、居最南、抵太白山云々なる記事の粟末部を強ひて、白山部と變改し、白山部を隋書には粟末部の東南とし、新唐書にはこれを東として居る記事を全く無視し、隋書に其國(靺鞨)與隋懸隔、唯粟末白山爲近とある記事を顧慮されなかつたのは如何であらうか。池内博士の如く號室を敦化地方にも置き、白山を間島地方に置いては、吉林なる粟末と白山との間に號室が挟つて、特に粟末を起點として白山をその東南或は東として居る隋・新唐二書の記事と矛盾する。されば白山は敦化とし、間島は琿春と同一區劃に入れて、他の部族の據所と見た方がよからう。

八、號室部

この位置の考定は、隋書に拂涅部の東とあるのみであるから、拂涅部の位置を何處に置くかによつて異つて来る。

- (イ)寧安以東依蘭富克錦以南 吉林通志
(ロ)依蘭以東の松花江近邊

松井氏(滿洲、一、頁四三〇)

(ハ)寧安地方 池内博士(滿鮮、十五、頁二八一)

二九

(イ)の説は池内博士も既に指摘された如く、この方面は三姓富克錦の間の松花江の沿岸を除けば、寧古塔の東方の黒山嶺山脈及びその東方に連なる完達山脈の支脈の交錯する地方で、これを一團の部族の根據地とすることは實際の地理に適合しない(滿鮮、十五、頁二八)(ロ)の説は依蘭以東の松花江の近邊は、黒水部を置くこと最も妥當なやうであるから、この地方に號室を置くことは適當でない。(ハ)の説は拂涅を榆樹溝附近に置く説に基いて居るから、拂涅榆樹溝説が成立しなければその論據が消失する。

既述の如く拂涅を寧安地方に置いて、これより東方に部族の據り得る地方を求めると琿春河地方が適當であらう。この地方は後魏以來勿吉即ち靺鞨の據所であつたやうであるから、號室をこの地方に置いても不都合ではない。琿春は號室の轉訛かも知れぬ。この地なれば高勾麗の滅亡後、その部族が奔散して居た事情にも適合する。拂涅の東とあるのは伯咄より見て、その

東方なる拂涅部より更に遠方に在つたといふ位の意味に解してもよからう。

九、越喜部

(イ)懷德附近 池内博士(滿鮮、三、頁一九—二六)
(ロ)拉林河若しくは阿什河下流域

津田博士(滿鮮、三、頁二七六—二

八一)

(ハ)阿什河流域 白鳥博士は越喜(Wel-Kie)と阿勒楚略の音の類似を理由とされたものである。

この部族の位置に關する資料は、冊府元龜(卷九)にこの部族が振國の西に在るといふ記事と唐書靺鞨傳に

渤海の北に在るといふ記事である。池内博士は前者のみでその位置を決せられて、振國の西邊に在りとし、津

田博士はこの兩者を顧慮されて、渤海の西北邊と見られたのである。これは要するに唐書の記事を捨てるか

否かで説が分れるのである。安車骨部と伯咄部が高勾麗の治下に在つて、その名が知られなくなり、その代り

に越喜部の名が現れたのであるから、安車骨部や伯咄部が高勾麗の治下に歸するや、後述の如く越喜州の名

で總稱されるに至り、これがその地方の靺鞨の部族名となつたとも推される。この想像が許されるなら、越喜部の住地は渤海の西北邊と見ることが妥當となる。

虞婁の住地に就いては、池内博士が越喜と共に唐に朝貢した事實から、この兩部族の住地の近いのを察せられ、渤海の扶餘府の置かれた農安附近とされた(滿鮮三、頁四九)、然し渤海の扶餘府の位置に就いて金毓黻氏の異説もあるから、池内博士のこの説も尙檢討を要する點があらう。

白鳥博士は唐書渤海傳に、安邊府の置かれた地として居る挹婁の故地は、虞婁故地の誤であらうとされて居る。

黑水部と鐵利部に就いては、小論「鐵利の住地に就いて」に於いて卑見を述べて置いた(史林二)から、こゝでは節略する。

十、高勾麗の支配

挹婁は漢以來夫餘の屬國であつたが、曹魏の黃初年間に至つて獨立したことは、魏志の挹婁傳に明記があつて全く疑ない。靺鞨に至つては高勾麗との關係であ

る。白山部の如く高勾麗の支配に歸したこと明らかなる部族もあるが、その他の部族に就いては尙異論がある。

(イ) 箭内博士は高勾麗の勢力が、隋唐時代に北は伯都訥以南の松花江全流域(即夫餘故地)を含み、又長白山脈によりて靺鞨の地に連つて居たと見られた(史學雜誌第二十四編頁五九)。

(ロ) 松井氏は粟末部・白山部は高勾麗領域内に在り伯咄・安車骨・拂涅及び號室も、假令その領土とならざりしにもせよ、これに對し服從の意を表はしたものと考へられた(滿洲、一、頁四三一)。然るにこれ等の説は、その論據を明示されなかつたためか、その後學界の顧みるところとならず、滿鮮地理歴史研究報告の出づるや、白山部の他の靺鞨部族は高勾麗の領域外に在つたと見られた如くである。(津田博士、勿吉考、滿鮮、一)

(ハ) 池内博士も隋唐時代高勾麗の西北境を輝發河流域に置き、北は松花・牡丹兩江の分水嶺なる牡丹嶺、及び哈爾巴嶺や、老松嶺を以て牡丹江流域の號室部と接して居たと見られて居る(滿鮮、十五、頁五〇—五二)から、矢張り白山部以外の諸部族には高勾麗の勢力は及んだとは見

られなかつたやうである。然し白山以外の靺鞨諸部が高勾麗の領域以外に在つたとす説の成立には次の如き困難が伴ふ。

(一) 隋及び唐の高勾麗遠征の際の記事には、高勾麗の軍中に在る靺鞨の衆が數萬と號されて居る(資治通鑑卷一七八舊唐書卷一〇)。これは勝兵三千に過ぎざる白山部のみのものとしては多きに失すると思はれること。

(二) 唐が高勾麗の滅後、その降戸を以て置いた州の中に、拂涅州や越喜州といふ名がある(新唐書地理志)。これは拂涅部や越喜部が高勾麗の支配下に在つたことを物語ると解すべきであること。

(三) 後魏時代から隋代まで高勾麗の境域は、東西二千里南北一千餘里であるのに、舊唐書高勾麗傳には東西三千一百里南北二千里とある。高勾麗は隋代から唐初にかけてその境域が遙かに擴大して居るが、南方百濟・新羅方面に於いては大差があつたとも思はれないから、これは北方靺鞨方面への發展であると解すべきであること。

右の如き諸點から考察すると、白山部以外の靺鞨諸部も亦高勾麗に歸服して居たと見た方がよからう。

然るに太平寰宇記卷七一には、

隋北蕃風俗記云、初開皇中粟末靺鞨與高麗戰不勝、有厥稽部渠長突地稽者、率勿使來部・窟突始部・悅稽蒙部・越羽部・步護賴部・破奚部・步步括利部・凡八部勝兵數千人・自扶餘城西北舉部落向關內附、處之柳城、乃燕郡之北。

とあり、又(開皇)十七年に隋帝が高勾麗王に賜うた書の中に、帝が王を責めて驅逼靺鞨固禁契丹云々とある(隋書高句麗傳)。これは粟末靺鞨突地稽等が高勾麗の壓迫を受けて隋に歸服したことを指して居るのであらう。これによると粟末靺鞨の主要部分は、隋開皇中既に高勾麗に破れて唐の勢力範圍に免れたのである。されば隋書に見える靺鞨七部に關する記事は遅くとも開皇十七年以前の狀態で、その頃より後は勝兵數千あり多く驍武で毎に攻勢に出で、高勾麗中に寇した粟末靺鞨が破れ去つたのであるから、他の伯咄・安車骨等の部の高勾麗に歿したのもそれから程ないことであらう。又牡丹江流域の白山部は勿論拂捫部のこれに歸したことも想像に難くない。斯くの如き靺鞨方面への高勾麗の進出が、隋を刺戟して遂に隋帝の高勾麗征伐の師を起さしめたのであらう。斯く考へると靺鞨諸部の中、隋初

から支那に朝貢して居た粟末部の主要部分は、隋唐に歸し、白山部は云ふまでもないが、粟末部の遺殘・伯咄部・安車骨部・拂涅部・號室部は隋の開皇末頃から高勾麗の勢力範圍となつたと見てよいことになる。只依蘭以東の松花江流域の部族、即ち唐代の鐵利や黑水靺鞨は高勾麗の勢力外に在つたと見るべきであらう。斯く考へると隋書靺鞨傳には靺鞨在高麗之北とあり、粟末部與高麗相接、勝兵數千、多驍武、每寇高麗中とあるのは、他の六部の記載と同じく隋初の狀態を示したものであらう。而して舊唐書靺鞨傳に、南界高麗とあり、唐書靺鞨傳に粟末部居最南、抵太白山、亦曰徒太山、接與高麗とあるのも、蓋し隋初の狀態を無批判に踏襲したものと見られるであらう。

然し箭内博士が牡丹江地方を高勾麗の勢力範圍に入られなかつたのは、尙不十分であり、又松井氏が號室部を加へられたが、氏の説によるとこの部は依蘭以東の松花江近くに住すとされたのであるから、斯る遠方まで高勾麗の勢力が及んだとされるのならば必ずしも妥當とは言へない。

渤海國と靺鞨との關係に關する諸説に就いては、先に外山軍治氏が觸れられた(本誌一五)から今は割愛する。

前述の如く靺鞨に於ける高勾麗支配の有無の問題に於いてすら、既に異論がある有様だから、その支配の機構や、それが靺鞨の社會・經濟に及ぼした影響の問題は、渤海に於けるものと同じく、まだ全く不可知とされて居る分野である。又彼等の移住と文化的向上との相關、その勃興と文化程度との關係等も興味ある問題であるがこれ等の點に於ける卑見は他日これを述べることにする。只こゝでは、早くからこの民族の文化方面にも多大の關心を有つて、渤海史考や古代滿洲の民族と文化(滿洲文化史觀收錄)等の諸勞作を發表された先覺鳥山喜一氏の存在が特に注目されるのを附記するに止める。

結 言

以上の如く靺鞨史の研究には、從來主としてその對象とされて居た民族系統や住地及び文化國の支配關係等に於いても、尙異論の出づる餘地がある有様である。さればこれまで顧みられること少なかつた文化・社會・

經濟方面の開拓は、殆どその緒にも付かない状態と言へるであらう。これは自身文献なきこの種族に於いて一に史料の不備によるものであるが、北方民族の中でも自ら文献を有する民族、即ち契丹・女眞・蒙古等に於いては、文化・社會・經濟方面の研究も近時漸く起りつゝあるから、これ等研究の成果と相俟つて、更に他の文献なき民族の場合と併行し、他方現今俄かに盛となつた民族學研究の結果を参照して、少ないながらも残存せる資料を整理すれば、この不可知とされる暗黒の世界に於いて、幾分なりとも光明が見出せるのではなからうか。

資 料

(a) 于闐・扶餘等五十餘國・各遣使朝獻(魏書卷五太安三年の條西紀四五七)。

(b) 扶餘王及妻孥、以國來降(三國史記高句麗記文咨王三年西紀四九七)。

(c) 但黃金出自夫餘、……今夫餘爲勿吉所逐(魏書高句麗傳正始中西紀五〇四—五〇七)。

(d) 西晉太康六年爲慕容廆所襲破、其王依慮自殺、

子弟走保沃沮（晉書夫餘傳）。

(e) 初夫餘居于鹿山、爲百濟所侵、部落衰散、西徙近燕、而不設備、燕王皝遣世子儁、帥慕容軍慕容恪慕容興根三將軍萬七千騎、襲夫餘、儁居中指授軍事皆以任恪、遂拔夫餘、虜其王玄及部落五萬餘口而還、皝以玄爲鎮軍將軍、妻以女、（資治通鑑卷九七西晉永和二年春正月の條）。

(f) 廿年（東晉義熙六年）庚戌東夫餘舊是鄒牟王屬民、中叛不貢、王躬率往討軍到餘城、而餘城國駢□□□□□□□□王恩普處於是旋還……

……守墓人烟戶賣勾余民、國烟二、看烟三（好太王陵碑文）。

(g) 自和龍北二百餘里、有善玉山、山北行十三日、至祁黎山、又北行七日、至如洛瓌水、水廣里餘、又北行十五日、至太魯水、又東北行十八日、到其國、國有大水、濶三里餘、名速末水、其地下濕（魏書勿吉傳）。

(h) 乙力支稱、初發其國、乘船泝難河、西上至太淦河、沈船於水、南出陸行、渡洛孤水、從契丹西界達和龍（魏書勿吉傳）。

(i) (粟末部) 依粟末水以居、水源於山西北、注它漏河（唐書卷二一九）。

(j) 達末婁自言、北扶餘之裔、高麗滅其國遺人度那河、因居之、或曰他漏河、東北流入黑水（唐書卷二二〇）。

(k) 達妮室韋種也、在那河陰粟末河之東（唐書卷二二〇）。

(l) 靺鞨在高麗之北、邑落俱有酋長、不相總一、凡有七種、其一號粟末部、與高麗相接、勝兵數千、

多驍武每寇高麗中、其二曰、伯咄部、在粟末之

北、勝兵七千、其三曰、安車骨部、在伯咄東北、

其四曰拂涅部、在伯咄東、其五曰號室部、在拂

涅部東、其六曰黑水部、在安車骨西北、其七曰

白山部、在粟末東南（隋書卷八一）。

(m) 其著者曰粟末部、居最南、抵太白山、亦曰徒太

山、與高麗接、依粟末水以居、水源於山西北、

注它漏河、稍東北曰汨咄部、又次曰安居骨部、

益東曰拂涅部、居骨之西北曰黑水部、粟末之東

曰白山部、部間遠者三四百里、近者二百里（唐書卷二二二）。

註

① 三國志以來支那の史書は悉く古典の肅慎物語の史實性を信じ、これと挹婁族とを同一視した。然るに我が池内博士はこれを疑はれて、一卓見を出されて居る（滿鮮、十三、肅慎考一四—一五頁）。即ち古典の肅慎は支那の内地に近い北邊の住民で、挹婁族がこの名を以て呼ばれるに至つたのは「三國の時新たに支那人の地理的知識にはいつた挹婁は、たまたま楛矢石磐を用ひてゐたので、古典的の知識が本となつて著しく支那人の注意を惹き、これこそ古の肅慎氏であるとせられ、爾來肅慎は挹婁の別名となつたのである」と言はれた。鳥山喜一氏はこの池内博士の新説に賛せられず從來の説に隨つて古典の肅慎と挹婁族との同一性を信じ、肅慎の名はこの種族固有のものとして見られたやうである。然し先秦時代に於けるこの種族貢獻の史實性は疑はれ、當時この種族は支那人と直接の交渉はなく、漢民族は實際の接觸で貂に就いて知識を得、これを通じて肅慎に就いての傳聞を得た。その傳聞が本となつて、周代の盛世や孔子の博學を飾るために、肅慎氏楛矢・石磐貢獻の物語が出来たのであらうとされた（滿鮮文化史觀、一二頁、古代滿洲の民族と文化）。

② 夫餘の據所に就いては、先づ松井等氏は遼の黃龍府（開泰九年東北に移されて後のもの）を、今の農安縣附近に比定され、この移される前の黃龍府（後の通州）即ち渤海の扶餘府は農安の西南遠からぬ邊と推定され、高句麗の扶餘城、更に古の夫餘王城も亦こゝであると斷定された

（史學雜誌第二十一編一六七頁）。池内博士は資料（c）により、慕容皝の夫餘攻伐以前に於ける夫餘の遷徙を認められ、農安西南近邊のもの、即ち渤海の扶餘府、高句麗の夫餘城は、西徙後の夫餘の據城で、西徙前の夫餘の據所は、今の阿什河地方であると斷定された。然るに金氏は遼の黃龍府の舊治、即ち渤海の扶餘府（高句麗の扶餘城）に就いて、松井氏説に疑を抱かれ、遼代黃龍府の舊治に置かれた通州の位置を考定し、今の農安よりは遠く離れた四面城附近に比定された。松井氏の研究は移治後の新黃龍府、即ち金の隆州の位置の考定を主とされたもので、舊黃龍府を農安より西南方遠からざる地に比定されたのには、何等積極的な理由はない。こゝに金氏の説の出づべき餘地がある。又松井氏は三國時代の夫餘王城を農安附近に比定されたのも、資料（e）の記事を顧みられず夫餘の遷徙を全く考慮に入れて居られなかつたからである。こゝに池内博士の夫餘阿什河説の出づる餘地があつたのである。然し池内博士のこの説は資料（c）に見える如く、夫餘が金を産すること、又魏志夫餘傳に於東夷之域最平敞也とあるのを理由とされたものである。資料（d）は後魏の頃の記事で、後魏の時夫餘が阿什河地方に居たことが既に疑はしく、又金を産することは獨り阿什河地方のみに限らない。されば資料（c）は三國時代の夫餘を阿什河地方とする説に大した支持とはならないであらう。更に夫餘の住地が平敞だとすることも、他の東夷との比較的事で、他の東夷が多く山谷に住して居

るのに比してのことと見るべきであらう。阿什河流域は勿吉の本據と見られるが、魏書はこれを其地下濕と記して居る。平敞なる夫餘の住地と、下濕なる勿吉の住地とが同一であるか否かは疑問の餘地があらう。

③ 長白山の固有名は、從太山の他に徒太山とも記されて居ることは池内博士も注意された(滿鮮十五頁六七)。白といふ意味の語は、女真語では尙加(上江)、赫哲語では kenging 滿洲語では kangyan 蒙古の文語では kagan Buryat 等蒙古の方言では sagang といひ、Dakur 語では isigan といふ。從(daiung)は徒(duo)よりもこれ等の語と音が近いから、漢語で太白山の意味なる今の長白山の固有名としては、從太山の方が正しいやうである。今のシラムレン(黃水)が弱水(晉書卷一一三)とか女古沒里(契丹國志)とか言はれた例を見ると、こゝに言ふ弱水速末・粟末も黃水の意味で、弱・速・粟は滿洲語の solho と同系統の語のやうにも見える。然し北流松花江の金代の名なる宋瓦江は、白江の意味のやうであるから、粟を宋瓦の略譯と見て弱水・速末・粟末をも白水の意味に解せんとしたのである。

④ 然し舊唐書奚傳の東接契丹、西至空厥、南拒白狼河、北至靺鞨、自營州西北饒樂水、以至其國として唐代の奚を饒樂水(潢水即ち今の)の北に置かんとする記事を全く誤と見ることは尙早計であらう。同じく舊唐書契丹傳には契丹の住地に就いて東與高麗隣、西與奚國接、南至營州、北至室韋、冷陁山在其國南(唐書には阻冷陁山以自固)與奚西山相崎

とある。この記事に見える頃の契丹の本據は冷陁山(老哈河の東に沿)の北に在つたやうである。而してこゝに東與高麗隣とあるからこの記事は高句麗滅亡(總章元年)以前の狀態を記したのであること疑ない。

然るに貞觀年間契丹が突厥より離叛し、唐に内附して以後開元末頃に至るまで、契丹の本據は營州(朝陽)からあまり遠くない地に在つたこと明らかなら、高句麗滅亡以前に於いて、契丹が冷陁山の北に在つた時代を求めんとすれば、貞觀二年契丹が突厥より離叛する以前のことにするのが最も妥當であらう。然らば舊唐書奚傳の記事も矢張りその當時の狀態で、隋末唐初契丹奚が突厥の支配下に在つた時代には、契丹は冷陁山の北、即ちシラムレンと考哈河の合流地方、奚はその西方なる潢水の北即ち今の林東縣地方にその本牙があつたのであらう。

通典が奚の住地を饒樂水之北、即鮮卑故地と記して居る(卷二〇〇)のも前後の關係から見て矢張り隋末唐初の狀態で、唐書奚傳に其國西抵大洛泊、距回紇牙三千里、多依土護眞水(老哈河)とあるのは、天寶以後の狀態を言つたのであらう。舊唐書奚傳の記事が奚の西方に突厥を置いて居るのに、この記事が奚の西方を回紇として居るのを以て見ても、その記した時代の異つて居るのが分るであらう。唐初奚が饒樂水地方に居たことは、貞觀二十二年唐が奚に置いた都督を饒樂都督府と稱したことから推せられる。